1.12. ウィーン便り (最終編)―― 国際原子力機関（IAEA）に勤めて：七年を振り返って（2003.3） ―

ウィーンでの公私の生活を綴ってきた「ウィーン便り」は本号で完結とする。先ずは愛読頂いた読者諸氏と編集の労を頂いた「ぱんぽん」編集部の諸兄諸姉に深く感謝したい。私自身にも貴重な記録になった。さて、IAEA 離任（定年）と帰国を目前に控えての回想と今の心境（2002 年 12 月脱稿）。

＊　　＊　　＊

国際原子力機関 IAEA での勤務のため成田を発ったのは、1995 年 8 月末長い真夏日が漸く終わった日だった。それ以来七年七ヶ月、当初の予定を大幅に越える長期の滞在を、公私にわたって「張り合い」を感じて過ごすことができた。座右銘になった自書「日新月新又年新」（原典は『大学』の「日新日日新又日新」）はその間の吾が心境を最も良く想起させてくれる。仕事人生の終盤を充実感で過ごせたことをとても幸せに感じている。送り出してくれた会社の幹部や仲間そして国の機関の方々、育ててくれた社会と仕事仲間、迎えてくれて一緒に行動した国連や諸国の新しい友人達、ウィーンの街の人々に心から感謝したいと思う。公私にわたって「最高」と感ずることができたこの七年半は、こうした多くの人からの素晴らしい贈り物である。

・ 吾が人生の最高点（心理的最高点と物理的最高点）

公務では「海水淡水化への原子力利用」という新しい課題を通して、日本の原子力開発の中で育った経験を、国連機関の場で生かせることに充実感を覚え続けてきた。それは「世界規模の問題解決に関与している」という貢献感であった。

「海水淡水化への原子力利用」は、IAEA 年次総会での恒例テーマだった。つまり関心の高いテーマだった。技術、経験のある開発先進国と連携して利用側の中心である開発途上国の技術向上を支援し、「水」という重要な課題で問題解決に携わっている、という充実感があった。そこに自分の経験（原子力）と趣味（語学力）が活かせる、という満足感があった。といっても、原子力開発は足が長いし、工業先進国での最近の逆風もある。途上国側にはインフラ整備や資金問題もあって計画が順風満帆とは行かない。そんな中でも、途上国関係者から資料の要求、国内での計画作りへの支援要請、研究推進や実プロジェクト立ち上げ支援等の要請を受ける度に「頼られている」と感じ、新たな気力になった。関心を示す途上国は増えており、開発支援に積極的な先進国も多いからこの先もこのテーマは右肩上がりの道を進むだろう、と思えることは究めて嬉しい。インドのモデルプラントは使用前供用試験が進行中である。パキスタンでも同規模のプラントが建設に入ろうとしている。韓国では小型の新原子炉を使ったパイロットプラントの建設を秒読みしている。韓国とインドネシア、フランスとチュニジアの共同開発研究も始まった。遅すぎる、と言われればその通りだが、国連内にも知人が増えて業務がやり易くも最近感じている。こんな公務環境が今の私を幸せにしてくれる。日本での定年は既に 2001 年 3 月に迎えている。その後の IAEA での延長戦を含め仕事人生の後半、多分に充実感を持つことができたと感謝している。「終わり良ければ...」と素直に思う。悲しいこともあった。1996 年に親友の訃報が届き、1999 年には母が逝った。他にも恩師、先輩、同僚、なかには後輩からも訃報を何通か受け取った。が、喜びがその悲しさを乗り越えさせてくれた。

私生活にも多くの思い出が出来た。先ず一年を一行で振り返る。

1995 年：応募(1)、面接(5)、採用通知(6)、歓送会、IAEA 着任(9)、同好会（ハイキング他）参加。

1996 年：トーストマスターズクラブＴＭ[1]参加。ドイツ語教室。国連英検パス。球技十種競技開始。

1997 年：公務のあとエジプト古代遺跡訪問。ＴＭ欧州コンテスト初出場（ドイツ Heidelberg）。

1998 年： Grossglockner（オーストリア最高峰 3797m）登頂。初の入院（耳下腺腫瘍手術）。

1999 年：「日本書画展」開催。Madrid で暴漢に遭遇。中国西安・敦煌訪問。母逝く。TM/ATM-B。

2000 年：インド Ajanta 訪問。Monte Rosa (スイス最高峰 4634m）等四千㍍峰六座登頂。南極大陸へ。

2001 年：「ぱんぽん」に『ウィーン便り』連載開始。日立定年。Mariazell までの 200km 山越え。

2002 年：アフリカ（Kilimanjaro 5896m）、西ヨーロッパ（Mont Blanc 4807m）最高峰登頂。TM/ATM-S。

2003 年(見通し)：回想ＣＤ編集。2004 富士登山計画本格化。『ウィーン便り』完。歓送会。帰国。

多くの新しい知人、新しい課題「水」やドイツ語の勉強、未経験だった異文化との接触など、五十路を過ぎて新たな体験を重ねることもできた。一方従来からの延長線でもトーストマスターズクラブ、書、山歩きと「寸暇を惜しんで」楽しめた。ウィーンに来る前のさらに十年ほど以前、「最低」とも言える人生の時期を過ごしていただけにこの七年半がことさら嬉しく心に残る。日本の旧友との交流が復活し、日本の良さを再認識し、今では「帰国もまた良し」と今後を見やっている。こんな私生活の楽しさが原動力になって、「ぱんぽん」に記事を書かせてくれた。

「枯れる」と言う言葉がある。年齢も還暦を過ぎれば「自然に枯れてくる」ものかと若い頃は思っていた。ところが、枯れてくるのは生体だけで精神的にはむしろ逆でさえある。新しく勉強したいことも出てきた、帰国後続けたい趣味もある、訪ねたい日本の土地も目に浮かぶ、さらには日本を起点に出掛けたい旅先も思いつく。それを考えられる現在の気力と健康がしみじみありがたい。万物に感謝したい気持ちになる。新しいものへの好奇心、感動する感性とエネルギーがあるのは悪いことではない、それを「若さ」というならいつまでも若くありたい。

ウィーン生活の七年半を満足感と達成感の中で終われることは非常な幸せだと思っている。こんな公私の充実感、幸福感が基盤になって、2002 年始めキリマンジャロ 5896m に登頂した[2]時の感動になった。吾が人生の物理的最高点である。今後もこの高さに来ることはないだろう。

・ アフリカ最高峰キリマンジャロ 5896㍍登頂（2002 年 1 月 4 日）（詳細版）

あの日朝六時、「ステラポイント（5700㍍）」に出たところで急に眼が覚めた。深夜零時過ぎに標高 4600㍍の最終キャンプ地を出てから暗闇の中の単調な登りが終わった時だ。その直前の記憶が欠落している。前夜の睡眠不足、高山病、寒さ、そしてあまりに単調な歩みの連続でそれまでは歩きながら眠っていた。

---

[1] トーストマスターズクラブ。人前での話し方を練習する自己啓発型のスピーチクラブ。英語主体。基礎教程を終えると称号 C(Competent)TM、さらに上級教程の A(Advanced)TM-B(Bronze)、ATM-S(Silver)、ATM-G(Gold)と進む。一段上に進むのにスピーチ１０件が必要で普通二、三年要する。

[2] オーストリア山岳会の山行。ガイドを含め私以外は全てオーストリア人だった。

先行する仲間に頭をぶつけたり、背後からも仲間がぶつかってきた。誰もが眠かったのだ。気が付くと「ベルクハイル」と叫びながら仲間が抱き合っている。「着いたのだ」。その輪に自分も入る。泣けてきた。涙が止まらない。この感動はどこから来るのだろう。出発前に考えていた、「人生最高点に立つんだ、頂上ではあれをしよう、これをしよう」と。この嬉しさは、辛い長い道が終わったからだけではない、目論んでいた頂上でのパフォーマンスが予定通り出来ること、六十歳の誕生祝という自分への贈り物が出来ること、ウィーンで送れている充実した生活への感謝をこの頂上で年の始めに祝えること、そんな幾つもの思いが心を占めて涙になっているのだ。眠気はかき消えていた。日本語で感激を共有できる仲間が欲しかった。ガイドのヴェルナーに抱き着いてたまらず「嬉しい」と叫んだ。本当のキリマンジャロ頂上はさらに小一時間先だ。が、道は緩やかだし頂上は既に見えている。

七時にその頂上に立つ。朝日は既に稜線を離れている。予定の儀式に着手する。頂上付近には不揃いながら石片はある。小高いケルンを建て、キリマンジャロの頂越しに東に向かい、日本に向かって三日遅れの新年の挨拶をする。自分への誕生祝、幸せな生活への感謝、今年の願い事、家族や友へのメッセージを胸に合掌。「願い事」を心で復唱し、キリマンジャロに「覚えておいてくれ」と口ずさむ。また感動が涙になる。涙が止まらない。見かねたヴェルナーが「泣くなよ」と声をかけてくる。儀式に半時間。ヴェルナーは待っていてくれた。他の仲間はもういない。

・「定年」

2001 年 3 月、㈱日立製作所を定年で退職した。定年挨拶状に書いた。「. . . 昭和四十一年入社以来、高速炉を中心に原子力開発に関わって来ました。その間、. . . 社内外の多くの方々と交流できました。 . . .

平成七年からはウィーンの国際原子力機関 IAEA で「海水淡水化への原子力利用」という課題を通して開発途上国への原子力普及に携わって来ました。残された二年間の IAEA 勤務の間に、後代に役立つ種蒔きのお手伝いに微力を注ぎたいと考えています。幸い健康なので、趣味のアルプス山行など楽しい思い出も重ねたいと思っています。. . .」

多くの人からお返事を頂いた。嬉しかった。人との交流が人生の最大の財産だと思った。連載中だったこのシリーズのコピーを社外の知人にも配っていた。それらの人からは読後感を頂いた。還暦祝いを兼ねて自分自身そして共に人生を歩いた同期の友への思い出を作っていた。前年夏死ぬ思いで登ったスイスモンテローザのドゥフールシュピッツェとジグナールクッペ、冬（現地は夏）の南極大陸、その夏に予定していたモンブランと暮れのキリマンジャロなどである。

先輩を見ていて「還暦」とは単なる通過点と考えていた。

寿命も伸びているし、大騒ぎすることもない、と考えていた。ところが、近づくにつれて少し考えが変わってきた。良く健康で来たな、苦楽いろんなことあったな、いろんな人に出会ったな、等々。原子力の走りでその将来に眼を輝かせて学び、自分に最も合うと思って選んだ日立製作所だった。正しい選択だったと信じられるのが嬉しい。瞼に浮かぶ人の顔は多い。鬼籍の人もいる。翻って後輩を思う。何人の後輩の瞼に自分が浮かぶかと思えば心もとないが、それは不徳の帰結。それよりも自分の得心が嬉しい。

多くの思い出が作れた人生だった。今後の人生にも楽観的でありたい。出会った人を財産とし、さらにその利殖を考えたい。「日立定年」手続きのため一時帰国した折に大学、高校同期の集まりがあった。現役も現役、社長で活躍する者も居れば、「完全引退、必死に遊ぶ」と言う者もいる。それぞれ後半生を有意義に過ごしているようで嬉しい。「人生の最期に、51%良かったと思えれば満足」と詠んだ高見順を思えば、今の自分はそれより遥かに幸せだと思う。気持ちを分かち合える友、空気のような家族。先輩、同輩、後輩、すべての人が納得の人生であって欲しい。

日立製作所に入ったのは高度成長の奔りの時期だった。大学では「学部第一期生」として新設の原子力工学を学び、希望と期待を担って社会人となった紅顔の美少年（？）も身を退く時期が来た。感無量である。唄の文句じゃないけれど「あの人この人」社内外でお世話になった人はもちろん数知れない。

その中から、海外勤務生活のきっかけを作ってくれたある先輩を思い起こす。当時開発の立ち上がり時期だった高速増殖炉「もんじゅ」の日英共同研究チームに誘ってくれた。私が三十路に達した頃だった。一年半のイギリス生活は「スポンジに水を含ませる」ように私に経験と滋養を与えてくれた。この先輩に反抗したり、仕事のやり方で生意気にも食って掛かった「若気の至り」を自覚するのは自分がその当時の彼の年齢に達した十年後だった。四十路を越えたばかりで、大きなプロジェクトをまとめ、その成果がその後の研究開発に残した意義を見るにつけ「出会いと恩」を感ずる。その後の中短期の海外出張は他人並みとして、IAEA 勤務が自分自身のこととして現実化したのも遠くにはこの人のお陰と思っている。そして今、「充実感、満足感」の海外勤務生活で職業人生から退く時期が来た。入社以来三十七年のうち、定年後二年間の延長戦を過ごした IAEA も含めて海外勤務が通算十年に及ぶ。長い方だろう。これも幸せだったと感謝している。

・「永住か帰国か」

そしてこの 2003 年 3 月、IAEA で二度目の定年を迎える。「ずっとウィーンに住まないのか」と時に聞かれる。ウィーンで定年を迎える国連職員にはそのまま定住する人が少なくない。環境は良いし、「住めば実に都」である。その場合は定年半年前までにオーストリア政府への申請手続きが必要だった。「少々迷ったが」私は帰国する。望めば永住権を取れるが帰る考えは変わらない。問題はその時期だっ

た。完全卒業も可能だが、私は心身の健康のためになんらかの形で働くリズムを保ちたい。IAEA 勤務経験が役立つ場もあるのではないか、とも思う。ならば直ちに帰国だろう。が、実はそのことが帰国の決意を迷わせる。

唐突だが母の晩年に話は飛ぶ。最後の二年余りは生涯を過ごした田舎の家を離れての施設（病院、老人ホーム）生活だった。同居できる子供が無く、本人も都会やまして外国に生活圏を移すのを嫌った結果だった。入院時の母は八十七歳だった。足腰が弱って治療目的の入院だった。が、頭はしっかりしていた。若い頃からの知的作業を程度の差はあっても続けていた。病院での栄養管理のお陰で体力も回復した。周囲の入院患者に本を読んで聞かせたり、唄をうたったりしてかっての教職時代を思わせた。他の患者への奉仕感, 貢献感が心の支えだったようだと知るのは老人ホームに移ってからだった。急速に弱っていった。老人ホームの入寮者は治療患者とは異なり、リハビリ目的が主な人たちだった。母より元気で若い人（と言ってもむろん私よりは上だが）が大部分だった。その環境ではもはや奉仕感，貢献感を母には持てなかった。「自分が他人より劣等だ」という感覚が生きる力を急速に奪ったようだった。

私の話に戻る。ウィーンに来てから心身の充実を感じてきた。仕事に慣れたことも大きいだろう。が、それより精神的なストレスを日本にいる時ほど感じないことが大きかったように思う。「のんびり」したテンポが私の性格に会うのだろう。周囲からは「行動的」と称される私だが、それも余裕が持てるからだ。ものを書いたり、語学に熱中したり、日本では考えにくかった文化的活動にまで手を出すほどだから。正直なところ、日本での忙しい生活リズムに完全復帰の自信は持てない。マスメディアも賑やか過ぎる、娯楽の対象も豊富だ、何事も便利にできているからやる気なら何でもできる。誘惑に弱い性格であることも自覚しているから、そんな環境で日本的な仕事環境に戻ると「自分が他人より劣等だ」という感覚が戻りそうな不安がある。「切磋琢磨」、「優勝劣敗」の厳しさには向かない性格なのだと自覚している。根は無欲で淡白なのだ。

私が IAEA で担当してきた「海水淡水化への原子力利用」と言うテーマは日本でのニーズは高いものではない。が、多くの開発途上国でその意義は増しており、IAEA の役割も続く。私の後任探しがまさに進行中で、私の離任までにはその人選がなされる予定である。日本での仕事に拘らないなら、しばらくこちらに逗留して不定期に後任者のお手伝いをすることも可能である。好きな「山」も「酒」もある。幸い生活費はさほどかからない。こちらにいるから却って接点の増えた日本の友もいる。それでもやはり遠からず帰国する。より多くの友に会いたいし、勉強したいことも出てきた。日本の良さもじっくり味わいたい。やはり日本が自分の故郷なのだ。

（完）